

(点略)なる註記を刻し、刊者中島四郎左衛門の名を次に入れた本、即ち、補刻本を刊行したのである。故にこの補刻本を刊行したのである。故にこの補刻本の刊行は実際には寛永八年より少し後の事ではあるが、この時に平基親の短序が始めて印刷されたのである。(後にこの版は京四条坊門通、敦賀屋久兵衛に移版)

而して、恵空版の短序の註記はこの中島版の註記とは全く同じである。これにより恵空が建曆版として用いたのはこの版本であり、この中島版は実際には建曆版に拠って開版したものではないが、この版に建暦元年の平基親の序がある為に建曆版によって開版した本と誤って使用したものである事を知り得る。

今、此の中島版と恵空版の内容を比較して見るに、恵空版は諸本と校訂している為に訓点の差は非常に多いが、本文に於ては殆んど差がない。即ち、字の異なるもの七十四、その中、斯と此、末と末、昆と毗、分と芬等の差によるもの五十、誤刻或は誤刻訂正によるもの十三あり、明かに訂正された字は十一字しかない。然もこの十一字の訂正の為、延応版とかへって異字になったもの八、同字になったものは三字しかない。明かに恵空版はこの中島版によっている。即ち、この中島版の出現により、今まで言われて来た短序の開版と建曆本と恵空本の関係の異なる事を知り得る。因に恵空本は延応版も校訂には用いたと言うが、それは印本ではなく、印本の写本である事を付加へて置く。

聖と浄について

橋本芳契

古来「三国伝通」といわれてきた東洋の仏教は、いまや四転して欧米の仏教と栄えつつある。そこに起った問題は原典研究と仏典の欧米語訳であったが、さらに思想的探求と儀礼的実践の課題がある。とりわけ浄土教については、その「南無阿弥陀仏」の称名を中心とすることとなると、西方極楽世界への往生を期するものとなるので、欧米人には特別な学習を必要とするであろう。中国における「教判」の事実そのものが、仏教の実践的具體化と理論統制を物語ったが、浄土教としては唐の道綽の『安樂集』における「聖道」と「浄土」の二法門の分類によってその宗教形態の独自性ならびに信仰精神の独立性を最も明確にした。そこでは在来の浄影・天台・嘉祥らの仏教教学が聖道門として一括され、龍樹・世親以来の正系浄土の法門がその中から独立した時機相應の活仏教として救い出されるを得た。おもうに「聖道」とはインド以念の伝統的仏教たるにはかならない。そこにあえて「聖」の字を用いたのは、インドにおける「アールヤ」(民族的神聖)の理解に、中国伝統の「聖」語をあてたものといえよう。仏教用語としての「三賢十聖」中、三賢は十住・十行・十廻向の菩薩で、それらは迷いから脱している「賢」であり、十聖は初地から十地までの「賢者」である。「聖」字の用法としては、他にも「聖教」

「聖人」「聖心」等多数あるが、共通して見られる「聖」の語の理解は、「智徳の高いこと、またそういう人」の意味に見られる。いづれにしても成果のすぐれた意味である。一方、「浄土」は清浄国土または清浄仏土の略で、「浄」は清浄の義にほかならず、「穢」に対する言語である。彼岸の「浄土」に対し「穢土」といえば迷妄の此岸、つまり娑婆世界である。もつとも娑婆即寂光土という立場もあるが、それも一応娑婆を低い世界に理解したうえでのことである。あるいは「清浄」に対し「汚濁」の「穢悪」が考えられてこのわれらの住む世界が「五濁」の悪世界とも称せられる。いづれにしても「浄」字は「清浄な」または「浄化しゆく」意味にもちいられて、さきの「聖」が成果のなるに比し精神の澄浄を主にし、行因的なことに解される。したがって「浄土」については維摩経などというように「浄心」もしくは「心浄」が原理的なものに考えられる。このような言語表現上の差違や対立から見られる「聖」と「浄」、もしくは「聖道」と「浄土」の両者の関係は、本来決して相互に矛盾するものではなくして、かえって相補的、因果的関連を有する語でないかと考えられるのである。すなわち「聖道」がもしかりにこれを史実に照して出家教団の出世間性を端的に表示したとすれば、これに対立したのは世間もしくは世俗であり、あるいは在家者の世界であって、これを「俗」の一語で示すこともできよう。したがって、「聖道門」のほかに「浄土門」の一流を探索することは、そこに出家教団から在家教団への傾斜のあることを意味するであらう。そのような「俗」世間に対置された宗教社会はいわゆる「僧」もしくは「僧侶」の世界で、したがって理想的僧侶社会が「聖道」として受取

られたことも考えられる。さて、こうした「聖道」もしくは第一義の(勝義)の世界と俗世間(世俗)に対し、それぞれさきの「浄心」と「穢心」を配当してみると、(一)聖道にして浄心、(二)聖道にして穢心、(三)世俗にして浄心、(四)世俗にして穢心の四の場合となる。仏教の時機観からは(一)の場合が正法の時、(二)と(三)の場合が像法、そして(四)の場合が無仏法に近い末法の時機とも考えられる。浄土教が真にその宗教的特色を發揮するのは、こうした時機佐の反省に即する「聖道」回復の思念いちじるしいときであったとすることができないであらうか。高僧和讃でも『安樂集』の心(約時被機)につけ「聖道万行さしおきて」とか「涅槃の広業さしおきて」とこそうたわれているが、その「さしおきて」はとりわけ右の(四)の場合のことで、(一)の場合については妥当しないと見なければならぬ。しかも「暴風驟雨にことなら」ない「濁世の起悪造罪」に即し、「すすめて浄土に帰せし」むる「諸仏」のお「あわれみ」を如実に感受していく(勸帰浄土)ところに「非僧非俗」の信心界が現証されて、「本願他力」の崇高性がまさに「聖」の理念において具成するのではなからうか。他にも『數異性』の第四節等をも参照すべきであるが今は略する。(ただその聖道はこの(二)の場合、そして浄土は(一)の聖道の主体的回復と考えられる)

數異抄の第一節について

藤原 鉄 乘